

秋季大会シンポジウム司会の記

高松 寿夫

上代文学会二〇一六年度秋季大会シンポジウムは、十一月二十六日（土）午後二時より五時半まで、東京大学本郷キャンパス文学部法文二号館一番大教室において催された。二日前には、観測史上初という十一月の降雪に見舞われた東京ではあったが、シンポジウム当日は、曇天とはいえずまずの日和で、会場の聴衆は順調に集まり、最終的には資料の追加コピーが必要になるほどの盛況であった。

今回のテーマは「万葉和歌の〈様式〉をめぐる」と設定され、会員から大浦誠士・平館英子の両氏、そして会員外から渡部泰明氏を招き、都合三氏がパネリストを務め、司会が担当した。前もって配布された案内にテーマの趣旨が書かれているので、ここに再掲しておく。

和歌は、『古今集』時代には、かなを用いた縁語・掛詞を主要な武器として理知的な表現を形成し、『新

古今集』時代には、先行の和歌を本歌取りすることで、曖昧模糊にして玄妙な歌境を創り出している。では、万葉和歌は、何を原理として自らを成り立たせていたのだろうか。ただ「素朴」というだけでは済まない、草創期の和歌がそもそも持っていた〈様式〉を具体的に照らし出してみたい。

この趣旨文の起草は鉄野昌弘氏によるもので、シンポジウム当日も、これに沿った趣旨説明とパネリストの紹介がまず鉄野氏よりあった。右の趣旨を受けて、パネリスト三氏が掲げた講演題目は、大浦氏が「枕詞と様式」、平館氏が「万葉和歌における様式―序詞をめぐる―」、渡部氏が「『万葉集』における「縁語」というものであった。題目の設定の仕方はそれぞれであるが、つまり三氏が枕詞・序詞・縁語という、和歌の修辞について基調報告を請け負

つたものである。

例年どおり、前半は各パネリストが順に講演し、休憩時間を利用して質問用紙を回収、後半は会場からの質問を生かしながら三氏と会場とがともに議論を交わした。前記したとおり、大勢の聴衆を集めた会場なので、質問用紙も相当量が寄せられた。寄せられた質問や意見、それをめぐる議論は、おそらく今号に各パネリストが執筆した論文に反映されているものと思われるので、ここで改めて報告することは省略に随う。正直なところ、休憩時間に回収された質問用紙を、休憩時間残りの五分間ぐらいで大雑把に分類し、どういう順番で取り上げるかをパネリスト諸氏とともに打ち合わせ、後半のやりとりを仕切って行くだけで、私の頭の容量は一杯一杯だった、というのが実際でもある。

とはいえ、内容にまったく触れないままで司会の記を閉じるのも却って恐縮なので、一点だけ所感を述べておきたい。会場からの質問では、「様式」とは何か」という質問がかなり集中した。これはもつともなことだとは思う。しかし、前掲の趣旨文に明らかなように、今回のシンポジウムの関心は、『古今集』の縁語・掛詞、『新古今集』の本歌取りという、それぞれの歌集の時代の和歌を特徴づける修辭・表現技巧と並ぶであろうものとして、『万葉集』にはながあるか、ということにあったのだと思う。その問い

かけに対して、三氏が枕詞・序詞・縁語という三つの修辭・表現技巧を取り上げ問題に迫ろうとしたわけである。

この場合、「様式」という語には、特段の含意はない（と思う。——私はテーマが決定した後に依頼で司会を請け負った立場なので、ことばの選択にあたっての詳細は承知していない）。私としては、「修辭」や「表現技巧」に置き替えても差し支えないカラツポのことばとして、この場合の「様式」はある。まずは枕詞・序詞・縁語という個々の事象について議論があるべきだろう。個別に論じていても、枕詞と序詞は実は案外に明確な線引きは困難な修辭としてあり、序詞は一首の本旨に密接しようとするところと縁語的な性格を帯びてくるというように、やがてそこには相互に通じ合う、なかが見えてくることもあるのだと思う。しかし実際問題、テーマに「様式」という語を、しかもへ～付きで用いたのだから、これは当日のような仕儀と相成ることは、避けようがなかったとも思う。

なお、このシンポジウムが開催されてわずか三週間後に、いちはやく笠間書院のブログには、高桑枝実子氏による詳細な報告文が掲載された。おそらく『リポート笠間』の最新号（五月刊行予定の由）誌上にも、それは掲載されるはずである。ご一読を勧める次第。